



御筆  
御筆

伊地知文庫  
文庫20  
334  
5



船橋の傘

伊勢知良書冊

无礙菴



先

名神

非名は新式也

乃神位者乃神なるべし

名はよあはれとて事なり

を能く其良の象よたり

神もいほくのまなり

幼きしとて名をを鳴とま

去日大明神とてふり

よあはれ只神のは名よ

とて事なりあはれとて

て名はよあはれとて事なり

あらしの物を名神に云々  
 といふ位なるをいふは  
 此の事なりと云ふは  
 約りもたさなりあやまり  
 庶はさるるを非君に  
 云々ありていふは  
 わき離れの神乃は名を  
 まのきつていふは  
 要なり也といふは  
 神也といふは  
 と名をよきいふは  
 句神よりいふは  
 成し云もいふは  
 理し云もいふは  
 神の夫名をいふは  
 名をいふは  
 成なりといふは  
 云々いふは  
 るらうといふは  
 山乃字にありて  
 乃の名よりいふは  
 といふは  
 といふは  
 といふは  
 といふは  
 といふは

名神  
 といふは  
 といふは

名神の事曰ふ  
 といふは

もくもくといふは  
 といふは  
 といふは  
 といふは

まよひのふゆまへ

名木のあゆみ

秋に葉をま  
つるはなをこ

同

只一しりあふこころのなる  
よ一本のめいあはわらじ

淋よいんをぬめこころと数えよ

よこてもい内なるまへしりま

めしりあめの内又本の月集を

のめあ敷のめあふまのつこあ

いんりの西登のめあう乃顔

あわらぬよ連のめあふあふ

とれを誰を流すりてさう

ぬまのしり塗ふしあまうさ

めも人あふよよ月あふのさひわ

よ一しりあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

よ一しりあふあふあふあふ

も人あふあふあふあふあふ

あわらあふあふあふあふあふ

のめああふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

二句あふあふあふ

あしつかりよい木箱とゆり  
よいのをさきへぬるし徳利  
ともさきへぬるよこぢり  
とゆり身よいのとゆりな  
まし遊よいのとよこぢり

足

初 不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>止<sup>ル</sup>若<sup>ク</sup>取<sup>テ</sup>新<sup>キ</sup>式<sup>ノ</sup>一<sup>ツ</sup>り

るし若も初乃池初乃まよ

く云句のまよし一屋のまよ

おもしろい人あるよしりり

不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>止<sup>ル</sup>若<sup>ク</sup>取<sup>テ</sup>新<sup>キ</sup>式<sup>ノ</sup>一<sup>ツ</sup>り

山中初池の初開の初室の

初と止まらうよまわしりり

初と止まらうよまわしりり

とま川人給有しりり新式

をさきへぬるよ初乃まよ

る初りそ耐ま別あしりり

え此の類おもそ初とまよ

文よ非居取又屋の語詞よ

あし初連小一あまし遊一の

二あし人し一屋あ小も屋よ

も場へ入るし初初下も屋

おもしろい初も初りと遊初

字種よのまよの屋のまよ小も

おもしろい初とまよしりり

久あまよまよまよの初式

小もまよまよまよの初式

まよまよまよまよの初式

初よ初し初まよまよの初式

初よ初し初まよまよの初式

く居りしりし寸りも指合ら  
白の邪よま魔とまじし正文を  
見ざるるる座と初と別  
くの物と初りし居るし初  
或よ不正なる座とのきられ  
とる座とつりし居るしとを  
毎つ座る人家乃物たり  
初る人家よあつし居る  
物とまじし座をさる座乃  
習ふと心ゆる座よ端ふ  
事しと不正なる座も初式  
小得りしりし居るしとを  
ま初めもさる座 初式を  
りし初定をさるしとを  
されし初文かまさるる座  
初式を可月明く初め

深

只一名初よ一初よ二名初

ひと乃肉と水のなまよ不痛

名初ありし初ふ二名初  
中ありし初二名初

初よ二名初二名初一又名初

二名初一もありし初

ありし初と初をくし初

ふとありし初と初と上名初

ありし初と初と初と初と

王と初と初と初と初と

ありし初と初と初と初と

ありし初と初と初と初と

ありし初と初と初と初と

甲也又初初初初初初初

那よの面をきくぬる一宅  
上を山やうをぬ山あしふ  
と累よれをゆふ流面を  
きくぬ流連よまらしくし  
那よのる指あ流ゆひく判  
乃字と不種山乃ぬりきよ  
累よといく一累よのとり第  
とる計あくゆひをぬしと  
君いぬり愚成候たわ山  
のぬりふあおもぬる者この  
うりああふよわ文字を  
あくゆりぬり白種えうり  
いけくもくゆしかく種を指  
六種あまの種あつとひと同  
一ゆりゆりよわりのをきく

三日月

とも那よの地のま

よ今一あふへ一三日月の初  
非種か九えまうへ入の種か  
あふへ一三日月と汁の種か  
かり三日月のおるを喚と  
あつる余り非とぬめく初  
かりあつ種とも物あふの初  
ましあふとありた可非種か

三日月よ日流村事場こり

初

一石流よ一橋よ一初式一  
産三句の流よ初ひあま

ともゆ代を初よ只二句ま  
笑とこ言扱よもんえあり  
那よハ初一石流よ一橋よ一  
初よひまの初よの初月の

初終の初 月を名とわくは  
終を名とわくは 月を名とわくは

不可月南初とあはれあはれ  
乃非不可月南初とあはれあはれ

上京下京四初 遷都初 初京  
上京下京四初 遷都初 初京

系安城洛陽洛中洛外洛  
系安城洛陽洛中洛外洛

東京西京北京の初と一と  
東京西京北京の初と一と

九重 九重不可言 初は面と名  
九重 九重不可言 初は面と名

大室林家中 大室百室平井  
大室林家中 大室百室平井

乃能大内山 仙洞院の出来  
乃能大内山 仙洞院の出来

とりの洞窟の 初屋乃山  
とりの洞窟の 初屋乃山

多と初九重よ七句まへ  
多と初九重よ七句まへ

は初おも初は漢と漢より續  
は初おも初は漢と漢より續

との系つりめ初らあへん  
との系つりめ初らあへん

初は初を論 初月を論  
初は初を論 初月を論

あは初よ初は別の初の初  
あは初よ初は別の初の初

よきこ初らる初らる  
よきこ初らる初らる

く初まの初ひるの初も初  
く初まの初ひるの初も初

初

初は初を論 初月を論  
初は初を論 初月を論

あは初よ初は別の初の初  
あは初よ初は別の初の初

よきこ初らる初らる  
よきこ初らる初らる



あまのつし灘よのちをて種るり  
物なる小石種

新島

の辺るり物よ面と種  
とあれく灘よの七白まへ

とて受るり物乃ま々もけふ

物るれし灘よのちと種るり

乃内よと物し又字小けり

物を種るといふ人さ人九重

法心よのめも不可種これ

憲法の審議をうり又物なる

とまへしままよありは物なる

その聲よ小食奥山上人種也

同くせし物しゆへは物合也

奥義と極めを極るり

ものるれくをくもくれり

あまのつし灘よのちをて種るり

あまのつし灘よのちをて種るり

あまのつし灘よのちをて種るり

宮

四神祇よ二皇居一二位  
い内一はくの名もよる

宮は久し事よ一あり灘よ

中宮無事よ名もよらるる

又中後事よとて種るり

と種るり一ありしつと入る

宮は宮よ名もよる

おの皇居し名もよる

尾上の宮よ皇居の宮も神

よありしつと種るり

皇居神祇混然多るる灘

よの神祇あくも皇居あくも

名所のうち二種名をいふ二  
種入ふきこりと漢宮一はと  
わふし之知事一 亦遊中交  
娘母一は二宮 之後中  
名乃文未の非補祇 非名和皆  
人偏之皇居のち乃二句は凡  
よ一はち之文居非居本宮  
乃字よ於二句まききうと  
被後時を付くも不若又  
務のち句おやまると皆二句  
介り動よ宮前付句場定  
住事動あくと被入よあつ町の  
付くも不若人の名よとや  
らよとや松あくと云はる宮の  
内之ち産神祇しちよは後  
儀句神生記よあつては  
み乃四なり

裳小

是打越を境と同云  
白よ裳の付く衣

昔云裳の目小も今も出  
もころの取捨物よ付くも不  
若裳の境り物よ不付く  
捨物小付くも不若裳の捨  
物よ不付くも、  
し裳の捨物よ打越と一過  
但境り物よぬぬよ付く  
もくは

三字の姓名

甲一也を境  
ハセ句可はま

字の若くは小境入と不境  
と名別あり名境之字の若

い洞を枕をうしよひつゆを  
屋うらまふとまなり 蝶三  
つゆりくつゆりくつゆり  
くくつゆりくつゆりく  
あまのくつゆりくつゆり  
おまのくつゆりくつゆり  
字の通ひあつらんぬい  
ゆよおまのくつゆりくつ  
うはくつゆりくつゆりく  
鳩も松成きよにまよひく  
洞の中よおまのくつゆり  
はなよきつゆりくつゆり  
きよ只一鳩くつゆりく

解名くつゆりくつゆり  
くつゆりくつゆりくつゆり  
おの事よあつゆもあつ  
くつゆりくつゆりくつゆり  
名くつゆりくつゆりくつ  
はなもくつゆりくつゆり  
水いよくつゆりくつゆり  
あまのくつゆりくつゆり  
あまのくつゆりくつゆり  
あまのくつゆりくつゆり  
あまのくつゆりくつゆり  
あまのくつゆりくつゆり  
あまのくつゆりくつゆり  
あまのくつゆりくつゆり  
あまのくつゆりくつゆり



おれと連よりり遊のり  
は乃倍程を流くふあは流  
乃字ぬれとさむしにさく  
なく定くく百物調りの  
たしをんあんきよこ  
これけあよらあさくあ  
去よ字あめあうり終る同よ  
ころくくもをさゆくあ  
こはあゆいと終る  
あゆた

あふれし流の字より二句  
まこ同と二文あふあまより  
とるんそ流の字より二句始  
や答とさ野さあをあさ  
あゆ人流の字をまもらゆ  
流の字より二句あゆりあ  
まゆりあゆ

見られ ちあせ句あよ  
句同とあ句の物  
あ三句あらあひこまれあ  
あはあゆあ三句よせあ  
あゆ余のうらぶあああ  
あ三句あああああ連と  
あ三句あああ

葡萄系 ちこ右流のああ  
系こ三月中辰の日  
かり

ああし 秋と連よりあれ  
ああし 遊よりあありあ  
乃字人あよあああ温涼  
いあああああああ

んまろろ舞もろろ赤もはろ二句  
を

神階 集中の玉階、中歌  
おしほしとけはの字をか

おしほしとけはの字をか  
ふれしとけはの字をか  
水くまきまは二階三  
階ふしとけはの字をか  
居前く玉階字のわらう  
たれくいはくぬくもは  
るる青さほくまきまは  
水階とらうとけはの字  
をくわをくまきまは  
ふふら但句神回一階  
勢よ清くいと二階一  
も回れよは不字は

あはく 云水のぬらじ  
まきとけはのぬらじ

まきとけはのぬらじ  
むくまくのまきとけはの  
そのおの水じまはの  
じとふらまはの水ぬら  
とけはのぬらじまはの  
乃まはのぬらじまはの  
まぬらじまはのぬら  
ゆふの神ひらくはぬら  
くちまは

お後 おしほしとけはの  
おしほしとけはのぬら  
おしほしとけはのぬら  
おしほしとけはのぬら

浦玄

まじらるゝ張りのあるや  
あつても交るり

うのち物

無きよ云津力字不  
鳩と云説か何物ん

二句つみ句つ二又句よ治定を  
句一つしほふ物と云ハ相の一  
字と云うこと漢と云ふハ此の  
字をまへくくまり物より一  
らふとハ相小付く味下  
ましく此字正字し酒をみま  
ふとく云よハりま物一酒を  
三寸しと云ハ正字のこま時香之  
ハ風寒ハ人ハん力と三寸しけく  
吹しと云ハり名ハりの物と云も  
此意は去夏あましは乃云  
物ハりハ製へ指物をPせし  
あり居うよ治のまよまきと  
とくちる物ハりる義しと名物  
ハ但其産のふ通次才よま  
さる人考りのこ

通とく

之句こ

三鴻

揚洲 豆列 西國小のわん  
よ山敷よあハ次但揚列

乃ハあ通し豆列とあ通しあハ

汀

二と一ハ名はなり

みくく

幣は乃字に不  
丸はくく幣と云  
くくは續よる細まへくと云

もこの法の子は付句を可成次  
帯の神の象梅りく海しす可  
此種も社檀と同しよに  
神のこころとさしよの神主  
乃成よみくこころのこころ  
有り人作りへしこころのこころ  
もよよお神つらとさ事なれ  
ともわめく法乃をなす  
付らよはまをよれんや只幣と  
乃くくくごりよ計のゆくと  
乃字よ不極こりむ新成よ  
物奥よ朝と云字付くとも  
しつこころの地乃門よ入る  
付是不度案とありて思  
かんとくくも法乃をよふ付句

みく

帝とある法の子の付く  
も不若る法門とも

りし二句云とら義もあり  
まきよの門よ面をて梅りく  
つともいれと帝乃正字あり  
よよ法門と書りんねと  
て字の漢をりりく去も又計  
たわ根おち大裏乃物なり  
口乃乃門よ海しつ次あり  
もよよとこがくくころの事なれ  
くともともやま子れ法名  
るりさくく後と門字かん  
もあくく更よ飛ぶの義あり  
解よ帝の字とんくくく  
この物をも法乃を門字の  
さす(ま)んや既よ梅をの



字よぬも不端もし始を  
印を責大然し〜付〜の  
名るれ〜も攝と云字のよに  
向〜ぬれ〜も〜  
よ新式お〜ありそれ乃  
ありは〜のぬらひ多有り  
い道理ぬ〜み〜は門のま  
も二句まお〜一務〜なる  
物〜再姓素〜清字お〜門の  
字よ〜も一向不端付〜も不  
昔〜あ〜を〜  
多〜成る〜有り〜  
云名と清屋と云義〜有り付  
あり和と云〜わたり〜有り  
あ〜ぬ〜は先官よ流乃字  
屋乃字ぬも不端連離  
よ去端の〜多〜のさ〜  
字よるれ〜大然乃更ハ素  
所〜ぬ〜有り〜  
ゆ〜ぬ〜なり

みぢぢのり

勅〜し詔も  
去ぬよ清の字

よ二句ま〜さわ〜し詞おも法  
おも皆二句ま〜成

見

社よ〜あぬ〜一切の法  
乃字よ不端一法〜二

向〜と〜あ〜も〜み〜  
名お〜も〜も連袂神も  
そ〜の〜を〜し〜  
社よ〜あぬ〜社よあら社  
承〜と〜又白〜も〜  
見〜こ〜も〜は社乃字〜



字二句婦ふと 無言よあちの  
得る只付白汁場ひくくで終  
かり

御愛ふ 納乃字二句さうり  
かり

みこき ころころ東波代乃  
こ改皆清乃字こ

見らぬ山 ぬらぬ山さうり  
のこころの縁こ地白よさうり魚

いとさうり

水よ 片くさこころさうり  
みこさうり片くさうり

皆と白き江と物さうり二  
白きこみみさうりこ二句婦ふ

ふらふらのあとお 写し給  
き又何

まも但びはくかしくんう  
まこよありひ肉あまさうり

書物のはま子の美名さうり  
文字の事まをたよまき

るやく不さ付回さうりわ  
繪も不書文乃字も悉結の

文情ねあまさうりさうり  
小のねくま物乃むのな文さ

實文撰又学者おの類ハ  
不書い作さうりも依り給さうり

道ふ 愛路 悉路さうり  
さうり二句かり山路さうり

乃安路よの白津さうり  
むりこらさうりさうり

等乃小も路小も二句を  
九折し乃乃通るよのり  
変るしぬよ路路山路  
路二句を

震小 かたは 雪面をゆふ地津よ  
七句で通ぬいふ句を

みづらみに 緑乃字不嫌  
或統よ行を始

とらりぬ後在よあし  
とらる二通もつり付事  
つりぬい面を下通吹上  
なき者の又後よ字に  
ささやうし小児をこしり  
こと付らいつれまこと  
見しりといの起り各  
あし道のぬるれい  
統を不用し

乃乃ゆり みづらみ 詞非  
迷懐地句

よらるる

乃乃のり ぬと 研  
蝶乃移

可云やのののよあし  
無言は條を去通よも  
寸をへ連秋神の古  
と心もと本食上人乃  
路のく慈悲のあぬり  
後よのあしをよあし  
まふとぬよしり  
あしりぬおしり

俗の蝶々小虫をわらへし方と  
 りいごうしとわらへし海一と  
 波はた大舟を現しわらへし  
 船はもろち小舟を現し  
 し芥子よ入るるも一と絶り  
 もゆりま死をさしわらへし  
 解款よい金翅鳥のあらは  
 大舟も敷きまらまきよ果と  
 くらむ情もゆり人の目よ  
 りいごうとまきこく方おの二字  
 を対くし一とゆらんや古  
 歌よい非情の果本のむとゆ  
 りと浪より事ゆりこ後松の  
 沸きおもわりとらんをね  
 うゆくとらんめくおらと古  
 歌よ月とらんをねくし

みるふ

むらん人かんくかん  
 むらん三あき馬二句  
 むらんちよ折後と二句魚と  
 むらん怪よゆり但橋より後  
 むらん不端を言ひて  
 むらん人おの云の  
 むらん又交打んりすと云  
 むらん小付と云やみこめり  
 むらんもぬしきあふと二句  
 むらん福屋よ河と寸さや  
 むらん鑿をのむじくふまよ  
 むらん今ゆりく二句下橋次  
 むらん句かゝりゆ神同意  
 むらんハ料理とて一と拾合  
 むらん不可と云

あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ

和州新  
正月十日百廿二  
あまのこゝろ

水口まろ  
あまのこゝろ

とみほ  
あまのこゝろ

みさおまろ  
七月廿七  
あまのこゝろ

水口まろ  
あまのこゝろ

あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ

義虫  
あまのこゝろ

志

あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ

よの一産二句排よの字或人  
三句三句三句三句三句三句  
着乃字付くも不若排よの  
時毎よ三句三句三句三句三句

一三句三句  
一三句三句

一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句

一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句  
一三句三句





林と入山志をせとこと木木と云  
すしあわもは難しととりり  
取こりのこ交たり取ととと  
もましかを所とと難し趙高  
う古更し干麻 菜々い乃麻  
い二も難し或いあるととり  
粉或いけしとととととと  
くくくくも秋し生敷り  
二句麻田の内し終麻 鹿鳴  
乃否乃乃わい田乃外之生敷よ  
もあは次及云麻乃字より  
面を三遍、お踏麻あはは林

下りえ

まし下崩しけいさぬ  
し野り、東り雲山

う庭りもホの又字をい  
崩れ乃下崩も同方し  
極物り二句菜木乃右あは  
りしは極物よ二句火のト  
筋ち各乃乃更しと代の佐  
くのあはは丸りのく新  
或よ下崩と汁わは極物  
よ折紙を場とわらわ野り  
原と不へくも下崩と云  
詞云よ成く云よ極うま  
る原らん本原らん何ま  
る原もももまよわ成く  
生わは物乃あはと真し  
下崩と云詞をまはるし  
あり野り、原、よ浪とけ  
ち茶世の小智のを別るの  
大地をら野り、あはるし

乃志情若のんそ海登のり  
修進山峯海川の多よも下  
崩ちてまゝのるりよ登り  
原うらまふにふれりまこと  
云流ちるりく思成流るれ  
こ継よハ新武の〜下前  
こ計もと人ぶ申しお定付  
まこは流敷ありあ〜次

下字

下字 下は山々舞りあま  
との又まそ〜と〜  
ふり〜重云扱よあ〜  
る〜めし〜  
ひ下の字は口傳き〜人ち不  
審あ〜もむ〜  
字あ〜

あこの字

あこの字 連は形を極と  
あれし継よハ  
面を可極げと發入は續  
ても一燈よあ〜  
てもは肉成る〜  
記しあり〜  
る言云〜  
あり〜  
みあり〜  
とま乃内は句ありと〜  
下野と〜  
布し〜  
す〜  
あり〜  
あり〜

下海

長敷と云く乃帯と  
下海と云く長敷の字

下海と云く乃帯と云く下海の

字又云く乃帯と云く下海の

字又云く乃帯と云く下海の

字又云く乃帯と云く下海の

字又云く乃帯と云く下海の

字又云く乃帯と云く下海の

字又云く乃帯と云く下海の

字又云く乃帯と云く下海の

志のふくく人をも  
志のふくく人をも

志のふくく人をも  
志のふくく人をも

志のふくく人をも  
志のふくく人をも

志のふくく人をも  
志のふくく人をも

志のふくく人をも  
志のふくく人をも

志のふくく人をも  
志のふくく人をも

志のふくく人をも  
志のふくく人をも

志のふくく人をも  
志のふくく人をも

志のふくく人をも  
志のふくく人をも

志のふくく人をも  
志のふくく人をも

志のふくく人をも  
志のふくく人をも

乃信ま一八拍をうく一志のふ  
ん一八拍は端悪よりんも佛  
は乃悪辱の衣をまきつらめと  
と云熟七又一八拍古法云く  
を志のふくも云たわももあふ  
うりわめ紙くく吟味くく端  
合を正八拍端とめく

志のふ乃むまおまひ

ひくくも一八拍の山敷よ二拍  
各々の志のふも信ましり  
まひり志のぬをまきくまひ志  
のぬ乃郡るくく云白りり  
悪るよ悪悪乃乃志のふま  
ぬも不害志のふまわら大  
悪悪乃乃志のふま

志乃ぬ揚 奥列信ま邦

縮るれし極物よわく次位  
古あをこれて後ふも悪る  
とまひりよまひりみくあく志の  
とぬとへよよめりひねよ志の  
極揚を悪るよまひり端や  
連よあましし継よ八面を可  
端もあうく拍をまきま物  
よ志のふまわりの敷板るりに  
りり終極くく寸新式よよ  
悪る拍くくくも行く志のふ  
まひりくくく一八拍の山敷のふ  
小西端

あふれ字 あふれ二只二つ

田連しあり滞  
よハ無辱乃衣徳無あ  
髪をよ續く一層よ又ほ

あへの車

あへ無よあり  
あへの流木無

乃まふ乃内之但二後句無

あふ字

あふの二二句ま  
ありあふのま

あふありあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あ

あふり あふりりりり  
あふりりりり

あふりりりりりりりり

あふりりりりりりりり

あふりりりりりりりり

あふりりりりりりりり

あふりりりりりりりり

あふりりりりりりりり

あふりりりり

あふりり

あふりり二句ま  
あふりりりりりり

あふりりりりりりりり

あふりりりりりりりり

あふりりりりりりりり

あふりりりりりりりり

あふりりりりりりりり

あふりりりりりりりり

あ

志乃めふ 目の字一白又  
うく 志乃付志  
乃この面をいし編ぶのまじ  
志のよ物あふまふくんのまふ  
不著志のめふめふのまふ  
かむあふく物あふよあふ  
取よ物且よ折紙と編む  
取むりあふも又河ふよ下編  
いとんまふ

志乃 志乃へあふ一白ま  
し 志乃のまふまふまふ  
志乃へあふ一のまふの連ま  
一白はく物あふも 離  
よの二白はくあふまふ

志乃ふ 志乃へあふ一  
志乃のまふまふまふ  
志乃のまふまふまふ  
志乃のまふまふまふ

志乃 志乃へあふ一  
志乃のまふまふまふ  
志乃のまふまふまふ  
志乃のまふまふまふ

志乃 志乃へあふ一  
志乃のまふまふまふ  
志乃のまふまふまふ  
志乃のまふまふまふ

志乃 志乃へあふ一  
志乃のまふまふまふ  
志乃のまふまふまふ  
志乃のまふまふまふ

志乃 志乃へあふ一  
志乃のまふまふまふ  
志乃のまふまふまふ  
志乃のまふまふまふ

わくしんこの内

まろ髪

連懐しるゑなま  
白髪又ち髪女の

又のつてはあしくあつる為  
ちゑよこつてく連懐り  
ちりくはむよ白くまの事  
乃連懐よ多りく連り  
面を髪しくあきしく髪よ  
七句可ま

志すまふ

冬にゆり地よ二句  
風はよ二句なり

志とゆきと回しやうに  
あつて書と面を髪へ流し  
ち髪よとて何髪よ風よふ  
り髪と書とのそふをいひ

あつる髪はあつてはあつて  
とらり書と面を髪へ流し  
と書と書ととあつてふれ  
ち書と書と二又まの事  
つてはあつてはあつては  
れを可髪書よハハハハハ  
し髪とあつてはあつて

志が

船乃舟もあつてはあつ  
と船乃字あつてはあ

志す一ま行よあつてはあ

志

八十志あつてはあつてはあ

志しすけはあつてはあつては  
志し一志よ一乃乃物の志  
小志しつり又志し物の志

乃下は鴻一君なり一とわ被  
里志る事い難よハ鴻二君  
ホ一君と云の物とわ宮  
界へ一極山敷水もよまき  
畑鴻ときうとてぬ鴻ありた  
とへん川鴻池乃中鴻屋  
のちいさな鴻ち水もよ計  
よまきうのく山敷は河守  
清海鴻えそら鴻臨珠の  
鴻ふの國の君ち大あくと  
山敷水もよあ守又國乃  
君よあうとて極とも鴻鴻り  
原遠つ鴻室の鴻山敷ち也  
よあう河田義乃鴻ち水也  
汁あくと山敷よあ守清鴻

只うきうら鴻く松鴻山鴻の  
敷も山山ありよ一とわ山  
敷も也あよまきうぬ鴻と  
ま計とも山敷もも也まうと  
へま志海物鴻りん志と鴻  
のまら志海乃水神あへん山  
敷もも水もよもあ守と鴻  
あもよあ守極列乃とあ也ハ  
うりあくと山敷ももあ守

白尾鷲

長鷲をけうふ時政敷もさ  
ふを鷲のまきとて守とま  
白羽あくと極へとも事あり  
まはま鷲のらよまのりあ  
の白とと張ちわとんて海山



へいひつらふまうしあめんやもの  
傑なり

志賀人の山紙

昔いふこと今も  
非を死と信ひ

のくひ非強

芍薬

友にのみ薬種乃名よ  
いづく難し死くらく

とも薬種のはよるくさば  
白紙をくく死の君よ成る  
友よたゆしを世とよあや  
まのくゆくこよみ日東を  
とく牡丹は混乱なりゆ乃書  
おも管見<sup>かんけん</sup>未<sup>ま</sup>知<sup>ち</sup>執<sup>しつ</sup>象<sup>しょう</sup>性<sup>せい</sup>吾<sup>われ</sup>が  
万安<sup>ばんあん</sup>もあ然<sup>ぜん</sup>ははよあひこと薬  
と付たりゆきる薬と一物を

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

牡丹よはの薬種なり

尸せんの為業よるなりと云  
目録中にて云々ありと云  
と云く云ふありと云ありと云あり  
見ゆらんなりと云難に云

清水 難に云ふと云ふと云  
かたきと云ふと云ふと云

只あを汲ら難に只あを  
結つと汲ると回事と云

難に清水を結ふと云と云  
しと云二句は清水と云あり  
面は清水に水増えたりと云

たつらり難に二面と云清水  
あはききと云ふと云ふと云  
汁増えたりと云ふと云  
清水もふと云ふと云ふと云

さうと云ふと云ふと云ふと云  
せんと云ふと云ふと云ふと云  
あはと云ふと云ふと云ふと云

柴戸 柴屋柴の房は柴

房の別は柴新物と云  
あはと云ふと云ふと云ふと云

く新成は柴戸と云ふと云  
ありと云ふと云ふと云ふと云

の房は柴乃戸は柴屋は柴  
るとの敷るは柴と云ふと云

と云ふは柴焼と云ふは柴  
又あるは柴と云ふと云ふと云

せぬと云ふと云ふと云ふと云  
つらりは柴二句ありと云

よは白紙をくくると云ふと云

右方より多し葉の枝をく  
極細くしたる葉をこれと  
はまよらるる人の雑木の太木  
あつらふはまよらるる葉  
下葉との小枝をくつらふと  
皆極細成なり

志すなり

道の志すなりはまよらるる  
乃枝をくつらふと

玉串の非極細なりと山岳  
あとの踏文字より二句端  
ありく道よまよらるる  
乃たらるる竹くも不若踏も  
又甲一踏路よりまよらるるも  
不極

連懐の枝の詞為二句

時をて付歌をぬきし

山上新式の終しは端やうの  
あつらふはまよらるる連懐の  
詞をれともかゝれと  
あつらふはまよらるる  
計端く連懐の六石を端と  
まよらるるはまよらるる  
あつらふはまよらるる  
句は連懐おもはまよらるる  
いふ新式はありくも依  
句はもく一概よりくは  
連懐くくくく

新式小山の

滴新の葉

非極細くつらふとまよらるる

家道ゆり物り苦乃敷と不  
八二句多りうきふうと久  
里は美しき菊山ハ不夜中  
右とち社の檜皮の軒より  
東不敷をうりふ多う人  
一古人心を思ふをこころい  
後まゝしき事しよゆみ下滴  
連灘をよれを二種中下に寄  
乃とくう里れを塩灘より面  
かりあとの京下乃京下海  
物よわく次

宿

一宿二句の物こころくき  
うりあわり宿の最前

かり又思ふ上虫乃此宿の前  
も同お膳宿池田乃宿後  
乃宿の同お膳宿人備  
さ人思ふもられん句よ思ひ  
連懐とみ町方よ八年をまゝ  
絲とみ所の宿をまゝとあり  
迷懐より一宿居るより一  
女と同宿しとく云句ハ非  
人備居る計し寺あり乃同  
宿人備と人あし居るよ不  
備宿場非居る非一人備  
尺さかり宿食料乃居る  
非居る宿業居るあり一  
乃又女一宿連一居るあり  
尺さ小もあり一宿世回お  
展宿あり八宿と曜師備  
毛木ハ星の鳴かり非  
不備連なりお宿り一  
産よ二句あり

くさるあり 連よおのこ

津よの面をうくく又三三

阿からく 舟越をよ下屋

まこくみくれと曙の影し

釣阿からくく又阿からく

又白ま津よの三句ま

霜 冬まきゆかこーま

をこ余の波物り二句

ま

外祓とく秋あま

皆三句ま

あろいといとく

あろまきしとく

あろまおび武目ふいんらん

あろまおれとあろまおれま

あろまおれま

あろまおれま

あろまおれま

あろまおれま

あろまおれま

あろまおれま



推しの 紅葉まぬまされとるん  
の美ぬまをなりくわわ

ふまされし推と汁も極  
しら美も葉もひまも極し

あけも 整り京り山りり  
世もふらりくまひ

只まのりくくさく草もあはぬ  
まひはれ美もふらりあけり

同あつとまらくしをさ年の新  
美も右連款よあけもとる

くりあつらりあけりあけり  
もひりあけりあけりあけり

のあけりあけりあけりあけり  
てまをへのぬくあけりあけり

乃心よあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり  
あけりあけりあけりあけり

詞のむまよあし詞のむ  
りしむまよあし詞のむ  
るしむまよあし詞のむ  
P. 10

あけむまよあし詞のむ  
二句 極稀

極稀  
いしむまよあし詞のむ

うしむまよあし詞のむ  
百約  
よみ

いしむまよあし詞のむ  
を代むまよあし詞のむ  
あしむまよあし詞のむ  
乃極稀  
あしむまよあし詞のむ

あしむまよあし詞のむ  
あしむまよあし詞のむ

あしむまよあし詞のむ  
あしむまよあし詞のむ

あしむまよあし詞のむ  
あしむまよあし詞のむ

あしむまよあし詞のむ  
あしむまよあし詞のむ

あしむまよあし詞のむ  
あしむまよあし詞のむ

あしむまよあし詞のむ  
あしむまよあし詞のむ

あしむまよあし詞のむ  
あしむまよあし詞のむ

あしむまよあし詞のむ  
あしむまよあし詞のむ

あしむまよあし詞のむ  
あしむまよあし詞のむ

あしむまよあし詞のむ  
あしむまよあし詞のむ





かろり

鳴 散なり物く好しきもの  
あつりつりくも好し

能 譜 法 傘

備

繪 小くきま 依 嘉 抱 了

い新武乃心と法よりきり  
きよまると極相よりなるし  
きよまるとしおわつりふまや  
きよまるとしと極物よも  
二句去るしとつみ人あれ  
し百人と極相よもなるあり  
相とつり極相よりせよ家  
し記道理よりつらわらふもの  
し記若陰よりつらふまの  
乃法なりしと極乃まよる

なす地権定

清心村 右巻のうきとまきし おの字ハ

官さしれん人備し

あすす

あびす あびすの 酒さ酌乃乃河

神祇多ありとくも西八分

乃内もとらけしりる夷

秋乃あいにちの各あされ

しけしとらけしりる

乃乃本 難しとらけしりる

乃乃本 とらけしりる

は

収定 あびすの 一乃にぬりしりる

いよひようとせよ後り

とあふも七句あふり

いよひようとせよ後り

いよひようとせよ後り

いよひようとせよ後り

いよひようとせよ後り

いよひようとせよ後り

いよひようとせよ後り

いよひようとせよ後り

いよひようとせよ後り

いよひようとせよ後り

いよひようとせよ後り

乃乃本

擒ひどし魚

多一船捕りしを  
ひふ小舟をこし  
本様神様様少こ様  
かこく今一ふ人し  
あこみよひここの  
田成りし様乃く海川  
名ふにありし様乃字し二  
乃亦成りし

目く

毎一産一旬の  
相し又字もあ  
よ書れりりもあも  
ふれしと板お蝶と  
かす様と蝶と一連乃  
能りしも相を路り終  
らしとち又とと一旬

ひ

秋し猶乃為よあり  
一産一旬乃相るれも  
あ二旬あり引る字よ三  
旬板乃字もも同の  
物し回を結ひしと  
二旬とありはつこと  
つらわく様乃回ら  
ひこしらふりあま

後いり

連ふよ二能得り  
娘風まの人の備に  
ぬ娘今一あり担  
り娘らと回娘ふも  
あし民婦も人備乃

もを所しくたさるふ船旅  
とて一壺よ三句ををく  
る人あし

ひらり

ききお一月松あとお  
一船借よのびわたり

独歩の独吟孤独の力独歩

今一壺よ三句ををく

乃獨活以りの独活回春

あしひらりとつづく

とくゆしつづく

字まふ人し独歩あしひらり

人備し一壺よ三句ををく

まし一壺よ三句ををく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

ひらりとつづく

とくくまの法よきれし一ふま  
小三句焼くなるこころり編よ  
とら相もる同字これなりわ  
かれし二句不焼く

火

四句乃焼く焼くし焼くし焼くし  
焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

焼くし焼くし焼くし焼くし焼くし

ても<sup>た</sup>於<sup>け</sup>ず<sup>す</sup>め<sup>ぬ</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>と<sup>れ</sup>武  
 ぬ<sup>あ</sup>ま<sup>ら</sup>ぢ<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>の<sup>れ</sup>た<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>  
 物<sup>を</sup>し<sup>て</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>ひ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>も  
 あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 への<sup>あ</sup>ら<sup>な</sup>き<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 ま<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 と<sup>れ</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 も<sup>あ</sup>ら<sup>な</sup>き<sup>の</sup>火<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>

火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>

月  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>  
 火<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>き</sup>

一のまの日な乃日秋の日  
冬日水日ま日わの三日  
まじ三日く日く日く教日を  
えく毎の三日あく五日月  
日く月子日祀詣よん西れ日  
富乃日乃教路日神り昔か  
惣日毎日冬日和やの日  
仏乃日びまの日成りし月星  
あくおの二句まきし船白ク日  
物階日久階くあ糸日入日日の  
くくゆく日乃果りりりり日  
も日の新日乃守日のみり  
つらつら白て日日くてりも  
て日日のまきくくくくくく  
清をとりくくくくくくくく  
し林路乃祀されしじくく  
まめ事しし日く日くくく  
日ま案く日日くくくくく  
日よ糸糸をく日く日く  
乃日く日波月次乃日くく  
く日く月星あの大儀く  
とくまきし他祀よんあま二句  
るり二倍しりくくくくく  
まきくくくくくくくく  
書を教るのし

日に登

はまきくくくくく  
くく日白祀

日乃登

くくくくくくく  
あすあまきく  
ひ一昨日の今日めくあま  
あまよんく日よくくく



つりつりあわぬ乃敷日次の目  
より二句ききし。大蔵の  
まじりし。

ひさす 虫敷しうくろくを  
一かこりちもよひ

く〜に准〜く〜を〜き  
く〜く〜ひ〜す〜事あり  
物類〜く〜く〜あかき  
〜日然かす〜く〜日  
もん〜も〜ま〜る〜  
きよの端へ〜

ひさまの山 日敷乃意日  
〜く〜日のみま〜

日備 乃日し天家よの弟  
〜日〜

日乃女日光山 日乃意  
〜

光の影く〜河の  
光の影を〜事〜

〜く〜光の影〜  
〜月日〜  
〜月あ〜日あ〜  
〜あ〜  
〜日ひ〜  
〜ひ〜  
〜あ〜

光乃字

月日星小一花書  
およ一光陰よりき

おとこの乃物に 飛よハ今一  
くつらういふのよ懐くつと  
いふはまのちまのあまのいひり  
とまのつひの日乃事なる  
もも里乃内し天像の二句  
燈あふらうと夜よよを  
二あつとよいふいひり一  
るつ原あつとあひ

久堅

久乃乃ののののの  
まよまよ大もよに二句

まし花よこのあまのくハ  
とつ賢いもあつり又よあ  
まひこのあまの久まよとつり  
おれに久まよとつり  
おれまよあつり  
久つらつとつあつり  
つら始をつりあつり  
連よ一唯二乃乃物に久一き  
もあつりつらつり  
あつりのれ他新あよつり  
指合まよつり  
あつりあつり  
あつりあつり

平助と家

あ乃まよあつり

ああり行進をいふ  
まはり源氏平氏を  
江氏等の祖神

秋

秋をり初給り  
乃一産よ一旬あつり

能くあつり



唱もあはれ物なるれはなほも  
くはしはなまゝに道おたよ  
まは帯袖して人なめとほ  
とめ一具乃物か袖とて白  
場へては問ふあはれ下細  
と下の帯もさるるにわ  
と袖もやト帯もさるるに  
を志むる若くはあはれ  
月時下細は同一の白  
作もまはれのしは産婦も  
腋をさあはれはなまゝに  
又男のたはれはなまゝに  
あはれはなまゝに帯もさ  
し積鼻視もさるるに  
くはなまゝに帯もさるる

帯もさるるに帯もさるるに  
あはれはなまゝに帯もさ  
もせよよはなまゝに帯も  
さるるに帯もさるるに  
あはれはなまゝに帯もさ  
連とくもわはれはなまゝに  
しつゝはなまゝに帯もさ  
道程をさるるに帯もさ  
あはれはなまゝに帯もさ  
あはれはなまゝに帯もさ  
笑はれはなまゝに帯もさ  
あはれはなまゝに帯もさ  
あはれはなまゝに帯もさ  
あはれはなまゝに帯もさ  
あはれはなまゝに帯もさ

実の糸も海糸に纏乃經  
子も三乃糸成たり

平林乃句小 糸の結乃句付  
多又平結も

句不字付定化唯之と新式  
の初と平結との糸乃句ゆ  
るま結乃句れるるし

ひきあふ

日本紀より神代雜と  
多事り結るる

ありありと神代とのゆも  
まある

君といふ

とら初との結と  
書ゆへは人成るま  
る二句と成し

ひきの國

化必とくゆり

一葉らしらふ

人傳はありけり  
初葉は色ふのまれ糸も海  
初る糸なり一葉か夜も一葉  
とらりも初結し

一葉れあひ

結し結結し  
流あしりて

とらりて新式の和漢の糸  
り一葉乃月海の結ひと糸  
結しとの糸とらりて糸も  
糸つ糸の毎結しとらりて結  
とらりて糸も糸も糸も  
つとらりて糸も糸も糸も  
漢よ結しとらりて糸も  
宿も糸も糸も糸も



うらさけ

ひらふにまわ

ひらふにまわ

それをおぼえしうきいふおぼ

二句まじ

ひらふにまわ

ひらふにまわ

しあまのこゝろを二句まじ

離

ひらふにまわ

久く離れし二句まじ

舎をひらふにまわ

ひらふにまわ

飛乃らまわ

乃ひらふにまわ

ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

乃ひらふにまわ

さし海へくれしあぢうと  
おふ会わしと作るなり  
さわりく月換ふへふ義し  
なま連し一勾乃物も辨し  
二勾より防おるれし法度  
を危ある理しるれあや  
まわりよまう勢あつて割と  
へふ事にあつた

ひひの  
袖伏乃事なり  
考始よふれん

ひひのせむく  
さし海へくれしあぢうと  
さし冷の字し極なり

ひひの  
たにまふ事なり  
てはまよふなり

廣瀬新田は流り  
四月四日  
日なり

和列よありあつて風やの  
非を新始ふれし

日一しは流り  
四月中の  
申一日し

ひひの酒  
あつて新始なり

二勾始と釀乃字をまね  
わすれしとあつたなり  
なまし六月朔より六月終り  
まじく日毎よまうことなり  
根元よあり

ゆゑ  
そらりあり  
わくことあり



七

袖を

袖は河を渡る

二句し新式一坐

句乃袖のふよおせり袖をこ  
り三文字のふよおせり袖をこ  
いふ句もまろ成び玉を袖を  
るくとかきあがり二句下句  
乃袖のり乃事なる袖を  
まはる二句とりて又入を  
と袖のせり袖をこり入  
る袖をり

も

能得よハ二句下

句乃也き句と

二句とせりら小形を習ひ

紅葉

一木の葉を

一木の葉を

ら乃橋はびか下成次連  
秋よはしこころり能得よハ  
あしあしとれをさくく  
甲し紅葉の橋連のよこ乃  
布とあれと能得よハ四葉  
内なるし葉をたゆへし  
紅葉よ又乃字二句まや  
あきして松竹の葉乃赤り  
能得よ又あしとれをさくく  
あきくくく意の袖を  
常流るよの又と二句ま  
又紅葉あらし面よ一葉は  
葉よ木のしあしとれをさくく  
の葉の紅葉よ二句ま

りんばしつちとて又乃字  
 も二句まし又紅葉りて  
 山乃又多るれは行くたも  
 連袂よ面をゆくと能得よ  
 へせりまらりてお葉のゆり  
 と秋しりりるとひりりま  
 又紅葉よ二句ゆ又おは  
 思ふ意の又よお家神乃  
 洞乃とてふふ又船のゆ  
 結乃鹿野乃又書れゆき  
 又も書し人まぬれ又お  
 〇あつさゝかへてくしん  
 神乃乃ともあふんはは  
 ともまてくしん能のとも  
 とりあれし本乃名りま  
 此乃乃あつさゝかへてくしん  
 神乃乃ともあつさゝかへてくしん  
 又おのともあつさゝかへてくしん  
 兼之語紅葉り二句まし  
 いはらよん乃つてくしん  
 と久し紅葉よあつさゝかへてくしん  
 ぬしつて紅葉乃あつさゝかへてくしん  
 や鳥をよもくしんあつさゝかへてくしん  
 をあつさゝかへてくしんあつさゝかへてくしん  
 しつちあつさゝかへてくしんあつさゝかへてくしん  
 何ゆきしつちあつさゝかへてくしんあつさゝかへてくしん  
 とあつさゝかへてくしんあつさゝかへてくしん  
 〇あつさゝかへてくしんあつさゝかへてくしん  
 りんばしつちとて又乃字  
 も二句まし又紅葉りて  
 山乃又多るれは行くたも  
 連袂よ面をゆくと能得よ  
 へせりまらりてお葉のゆり  
 と秋しりりるとひりりま  
 又紅葉よ二句ゆ又おは  
 思ふ意の又よお家神乃  
 洞乃とてふふ又船のゆ  
 結乃鹿野乃又書れゆき  
 又も書し人まぬれ又お  
 〇あつさゝかへてくしん  
 神乃乃ともあふんはは  
 ともまてくしん能のとも  
 とりあれし本乃名りま  
 此乃乃あつさゝかへてくしん  
 神乃乃ともあつさゝかへてくしん  
 又おのともあつさゝかへてくしん  
 兼之語紅葉り二句まし  
 いはらよん乃つてくしん  
 と久し紅葉よあつさゝかへてくしん  
 ぬしつて紅葉乃あつさゝかへてくしん  
 や鳥をよもくしんあつさゝかへてくしん  
 をあつさゝかへてくしんあつさゝかへてくしん  
 しつちあつさゝかへてくしんあつさゝかへてくしん  
 何ゆきしつちあつさゝかへてくしんあつさゝかへてくしん  
 とあつさゝかへてくしんあつさゝかへてくしん  
 〇あつさゝかへてくしんあつさゝかへてくしん



そこのへいむむむむむ  
きくしあきしむむむむむ  
たて人物もあきむむむむ  
しむむむむむト界中印葉  
しむむむむむのむむむむ  
たゆり二句しむむむむ  
むむむむむむむむむむ  
とむむむむむむむむむ  
とむむむむむむむむむ  
うんむむむむ二句しむむむ  
況むむむむむむ

物乃の

物乃の...  
は物乃の...  
ハ物乃の...  
物乃の...  
物乃の...  
物乃の...  
物乃の...  
物乃の...

物乃の

物乃の...  
物乃の...  
物乃の...  
物乃の...  
物乃の...  
物乃の...  
物乃の...  
物乃の...  
物乃の...  
物乃の...

文字の海

乃が...  
用文字余不...  
由見和

文按事連新武場形紙物に  
而も入る身又之又の字余り  
又の字余を付はらざるゆへ  
うりありにありはまゝ  
しか又まゝに然し二句まゝに  
月乃其まゝありとあるがし  
わゆまそられを然ありし  
と云はるはあまゝに名物あれ  
や名物かむくまゝの物々  
くまゝしつゝかへん役ま  
てもお紙はれさるゝ  
不若た云々包まゝにまゝ  
めい

# 鵲

秋し鵲乃其葉も秋連  
し鵲一丸は飛よ二三  
は

この字はなり

# 百舌

此居る名物にあり  
川裏乃るなり六月大

多し字井の底林の中  
中肉裡乃也若しハ  
物をばえしハ林の中  
事少しハ此乃名物の  
名とくハ竹とくハ竹と  
れと連しハ乃物ハ飛よ二  
わりとハハ乃名物ハ  
ハ飛よしハ乃ハ竹とくハ  
百乃字ハハ竹とくハ  
連しハ乃字ハハ竹とくハ  
ハ物ハハ竹とくハ  
續りしハハ竹とくハ  
乃字ハハ竹とくハ

百歳一とく百官とく  
これも物なるに  
多し一初物よ百歳とわ  
し二も物よ百歳とわ  
百歳とく百官とく  
とあふ一海とく

求子

神祇少くも事なれ  
し神祇より神も乃  
名といふ現われし  
の神系の神も子  
あふくは源氏乃  
て冥白取乃か  
にまると  
しわらぬも  
とあふくは源氏乃  
て冥白取乃か  
にまると  
しわらぬも

漢物とく今も  
あふくは源氏乃  
て冥白取乃か  
にまると  
しわらぬも  
とあふくは源氏乃  
て冥白取乃か  
にまると  
しわらぬも

藻乃花

藻乃花

森

森  
あふくは源氏乃  
て冥白取乃か  
にまると  
しわらぬも  
とあふくは源氏乃  
て冥白取乃か  
にまると  
しわらぬも

安藤も利のつらふも  
えれしちしあひよあし  
あんくあしあしあし  
字もあんくあしあし  
付くもあしあしあし  
ものもあしあしあし  
像もあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし

あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし

あしあしあし

あしあしあしあし  
あしあしあしあし

あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし

あしあしあし

あしあしあしあし  
あしあしあしあし

あしあしあし

あしあしあしあし  
あしあしあしあし

あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし  
あしあしあしあし

あしあしあし

あしあしあしあし  
あしあしあしあし

口へあつては乃新同家  
物の○とつり  
壬午年八月五日

物ものの○とつり  
御子の小唯まをの  
文子ぶんし小唯まをの  
御子の小唯まをの

もつり次  
連ゆゑの年  
つりつり能あつて文よ年よ  
もつりつり能あつて文よ年よ

二つりつり能あつて文よ年よ  
つりつり能あつて文よ年よ  
つりつり能あつて文よ年よ  
つりつり能あつて文よ年よ

百子鳥  
つりつり能あつて文よ年よ

乃中あつて能あつて文よ年よ  
つりつり能あつて文よ年よ  
つりつり能あつて文よ年よ

つりつり能あつて文よ年よ  
つりつり能あつて文よ年よ  
つりつり能あつて文よ年よ

八月五日  
つりつり能あつて文よ年よ  
つりつり能あつて文よ年よ



あつりあつりの鼻はさなる  
ふかき雷をももつてさなる  
その夜自見しくさなると思  
たり推量おとくいぬぬる  
あつりあつり

深しほし  
深しほし

勝

蝉  
蝉とさつと蝉といひは秋は  
く涼かよひ蝉くたまる

但文字あつれしとせ  
といあつりあつりいひあは人  
乃名も蝉は蝉をれぬ深  
秋の蝉はあつりあつり

二乃月成るる一蟪蛄も蟪蛄  
るる蟪蛄二乃月

蟪蛄  
蟪蛄は日晩  
蟪蛄は日晩

蟪蛄は日晩  
蟪蛄は日晩  
蟪蛄は日晩

冥  
冥は日晩  
冥は日晩

冥は日晩  
冥は日晩  
冥は日晩

の務よりわく原居るよあつ  
とく冥なるこゆりあやの務  
冥倉冥乃戸の務はよ二句  
とへ一わき紀をせつるの  
冥去ぬをせむり冥うり物  
をせつる洞をせつるよの務  
和よあつ洞をせつる水と  
とく霧をせつるあつる代  
とくよと一庭よ二句く冥白ハ  
あつわきあつよもび二句乃内  
冥乃冥よの面をせつる但る見  
と終よは續句よ二句よと  
冥白あつるせつよは終くも不  
管但らまんよと終よは續句よ  
ハ終よは終句よ山よあつる冥  
ハ終よは終句よ山よあつる冥

山

大空乃名あつ山歌よ  
たつる難し句神よ  
あつる名あつ山歌よ  
あつる山歌よあつるよ  
事と中又撰て山歌よあつ  
とく一とあつる

山歌

あつる

山歌

あつる

あつる

あつる

とくせんとしと回

家

珍史 朽し船務よハ二句を

すこしはさ 云の響詞し

うよあはれなれしころま

とてあぶ 連多ありいあ

船務よあまよまはれよ一納涼

とあまよひのくはまれとく

ゆこころし又あまをま

役をともあまをま

涼よあまをま

とてあぶ

一二百まし又涼しあま

とてあぶ

とてあぶ

あまこの裏よあま

き通梅よあま

乃肉らりま

為 一毛花しとく

と船務よあま

とてあぶ

この肉もあま

と船務よあま

とてあぶ

とてあぶ

とてあぶ

とてあぶ

乃家うもてしきゆく物家  
ゆへに新し祢祢し花よのし  
居あし目のあつては為り  
るやとてもび内成るし為  
らるし新しるるの冬に

**栢**

船遊よ一雙二句とん一  
住乃家うもてしきゆく物家  
二句とん一  
二句とん一

**栢**

船遊よ一雙二句とん一  
住乃家うもてしきゆく物家  
二句とん一  
二句とん一

**住居**

住居よ一雙二句とん一  
住乃家うもてしきゆく物家  
二句とん一  
二句とん一

**捨乃家**

捨乃家うもてしきゆく物家  
二句とん一  
二句とん一

くまなく二句まじりよきそ人  
桑のしりけくもも娘のうま  
よ二句人うも二句人場し

男と娘に世を捨つ時ハ

捨つを場し連よわれ  
眺るに面らるりてさるる  
されしも男を捨つし世を  
捨つも同様乃句るれし  
おろしけりやまめくふあそ  
ひ糸子を捨つ家ととつる  
室ととつるあそつる  
も連懐らるる世を捨つ  
男と捨つるの捨乃字よ捨つ  
を去へし連懐らるる寸し

次ハ 兼乃名なれも水

ハ非水也  
水色よりあしあ

硯水 硯連よ一われし眺

ハ硯屏又あおの硯海と  
そくと一まへし硯乃字  
けり縁とも松陰あゆひん  
きささるる重なり乃硯しけ  
をささるる海なり一あおる  
硯海よ六面らるりさるる

珍麻海 山勢一あしあ

珍麻とらるりも飛乃らる  
まじり山勢ゆあしあ

字麻乃字...  
多辨と終の字...  
又如麻乃...  
而乃...  
又字も...

**炭** とこ もろ 山 電

山敷之炭...  
あつ人...  
連...  
乃...  
乃...  
乃...

乃...  
乃...  
乃...  
乃...  
乃...  
乃...

**巢** す 鳥 居

乃巢...  
の...  
字...  
一...

**沢** さわ 水

沢...  
源...  
乃...

なほし形或ふ不坐田さう候と  
わかれし今うの難し

わ撲 秋も中より候とらふ  
はらふ乃うま候し書簡の

字ふあふひりきり溜へり  
と内裏あつて月乃下旬  
ふりきり

とと海き

丁二きんま  
白も秋一旬

今一冷き連一とあれし  
能く冷知るく秋あひひく  
三句と一冷泉院冷泉  
所あつたさ海きと  
ふり一と句きり一書を  
不持ひり一このあり水辺

巻

飛よの約巻玉とあれ  
海子巻は巻又巻  
なほなほは候とつ二  
あれこのく候とつ二  
乃親よと句隔くさへ  
ぬこ原もあつて巻一  
二句きり

秋乃白

秋乃白し物物よ介  
秋と連ハ秋と

乃秋とつと二句あれし  
能くは中下し秋乃親あ  
秋とさき巻お乃月以上  
わをくくつと句と一  
秋乃名の秋原は人物行  
わは秋秋秋秋秋秋秋





問松ヶ湯松浦るゝいみ  
うらわあゝ物物よあゝ  
うらわあゝ何昔も松ヶ湯を  
浦ハゝのふねありゝゝ  
え守ゝあゝ昔ゝり乃ゝるゝり  
し徳後乃ゝ去山末乃ゝ去山  
松わゝいゝりゝ松初ゝ一切の  
名ふよび種屋ゝゝゝゝ  
ふゝゝゝゝゝゝ

と世の

山歌おわするゝ  
抄集よ二句場と云

況わりの形哉とと松浦山歌  
らゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
葉もれし山乃とと  
あゝ松浦ゝりゝゝゝゝ  
世の  
葉松とと松浦ゝりゝゝ  
ち山乃梅りゝにありゝゝ  
いゝ松浦のすゝゝゝゝ  
いゝ松浦ふ二ゝゝゝゝ  
理ゝゝゝ併形哉よゝゝゝ  
いゝあゝれゝ白練のゝり  
て松浦ゝすゝゝゝゝ  
二句まゝ下のみよゝゝ  
くゆゝゝと句まゝゝゝ  
乃計の事ゝゝゝゝ  
のゝゝゝゝゝゝ  
よゝ二句まゝゝゝ  
ねをゝゝゝゝ  
松ハゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝ

下しすまゝの如く後世に  
まゝすまゝの如く二句傳へ  
一末世に傳へる人々す

水色(水)と水地 二句まゝし

例 二今まゝの如く傳へる人々  
まゝの如く傳へる人々す

信者乃非 二今まゝの如く傳へる人々  
信者乃非の如く傳へる人々す

後世の如く 二今まゝの如く傳へる人々  
後世の如く傳へる人々す

善人の如く 二今まゝの如く傳へる人々  
善人の如く傳へる人々す

今二句まゝの如く傳へる人々  
今二句まゝの如く傳へる人々す

あつしん へいご (いんげん) へいご  
くわん へいご (いんげん) へいご  
くわん へいご (いんげん) へいご  
あつらん へいご (いんげん) へいご  
くわん へいご (いんげん) へいご

あつらん へいご (いんげん) へいご

あつらん へいご (いんげん) へいご  
くわん へいご (いんげん) へいご  
あつらん へいご (いんげん) へいご  
くわん へいご (いんげん) へいご  
あつらん へいご (いんげん) へいご  
くわん へいご (いんげん) へいご

あつらん へいご (いんげん) へいご

あつらん へいご (いんげん) へいご

あつらん へいご (いんげん) へいご

あつらん へいご (いんげん) へいご

あつらん へいご (いんげん) へいご

あつらん へいご (いんげん) へいご

三十一

三十一

帝畿宣風坊書林

无礙菴

井上忠兵衛

野田治兵衛

Handwritten notes and a red seal on the left page.

